

〔書評〕

元田與市著『秋成綺想』

— 十八世紀知識人の浪漫と現実 —

山下久夫

書評とは、対象とする著書を裁くのではなく、可能な限り著者の視座に即する中で、評者が何を学び、どのような問題を発見したかを明らかにすることが基本だと私は信じている。発見した問題に照らし合わせるとき、はじめて対象とした著書の意義や批判すべき点などが浮かび上がってくるだろう。したがって、ここでも評者自身が本書によって触発された問題意識を提示する形で論述を進めるスタイルを選びたい。

上田秋成の『雨月物語』は、和漢の古典を涉猟しながら表現を洗練し高度な文体の達成を目指して尽力したと言われるが、本書の著者も、文体や表現の工夫にかなり意を砕いたように思われる。言葉が冗長に流れるのを極力警戒しながらも、粘り強く説得する表現の工夫がなされている。また、自説に客観性をもたせるために、作品の背景を示す文献を広く調査することも心がけた跡がうかがえる。多くの漢字にルビが施されているのも、読みやすさを考慮したという以上に、作品、人物、事項などの読みに責任をもとうとする著者の見識のあらわれに違いない。

さて、本書を通読すると、いくつかのテーマが明確になる。それは、秋成研究が常に問い続けなければならない問題だ。まず序に相当する章だが、ここからは、初期小説（浮世草子）↓『雨月物語』↓『春雨物語』と展開していく際の、秋成の文学意識の変遷をどう位置づけるかという問題を導き出すことができる。著者は、近世の怪異小説の流れにある『雨月物語』が、封建社会に生きる人々のさまざまな思いを幻想境に置き放つた意義を認めつつ、『春雨物語』では現実を描くのものにはや幻想境≡異界の間の装置を必要としなくなったとして、次のように述べている。

現実の観察者（リアリスト）とでも呼びたい晩年の秋成。ここで言う現実とは、生命力を拘束しようとする公的秩序（封建規範をはじめとする人間社会の枠組み）と、公的秩序を越えようとする生命力との葛藤と、その対立を相対化してしまいう自然という巨大な力への凝視をとおして作者が手にしたものの、秋成の言う「命禄」をも含みこむものと言えようか。著者によると、晩年のリアリスト秋成は、幻想境の装置なしに

偶然と恣意によって翻弄される人間の過酷な運命をそのままみつめる人であり、不幸である自分自身さえも世の価値観と同様に突き放してしまう驚くべき造形をなし得る人である（例えば「宮木が塚」の宮木）。著者からみても、『春雨物語』は、何らかの装置に則って表現していた『雨月物語』とは決定的に違うのである。

そもそも、『雨月物語』と『春雨物語』とでは「物語」の質が異なるのは、誰がみても明らかだろう。しかしこれまで、「物語」の概念や「物語」と呼ばれる根拠などを問いつける文脈において、二つの作品の関係が正面から論じられたことがあっただろうか。単発では意味がない。問いかけの継続が大事なのだ。『春雨物語』の「序」に言う「物かたりさま」の解釈は、「物語」を文学史・表現史の上に位置づける試みと、そのジャンルを選び取る作者の内的必然性への理解に基づいてなされるべきである。本書の「序」を通読するだけで、こうした古くて新しい問題が立ち上がってくる。著者も、通常同じ問題を抱えているからに違いない。

ただ、著者の言い方だと、同時代性から次第に超出していく秋成にすべて還元されてしまう危険性を感じる。現実の観察者（リァリスト）、巨大な力への凝視という地点で孤高を保つ秋成を云々するところで終わっているのではないか。これでは、たちどころに秋成を特権化してはならぬと反撃されるだろう。「現実の観察者」の境地は、さまざまな試行錯誤の果ての到達点ではあるまい。むしろ、そこでもまた何かが始まろうとしているのではないか。このあたりへのこだわりが薄いのが気になる。そう言えば、

第1部の「初期小説の水脈」でも、「和訳世界からの超脱」ということで、「真くさき虚言」に安住した人間の日常性を破るものという位置づけがなされていた。『春雨物語』の「序」の解釈においては、「形式からの離脱」という点に意義が見出される。いずれも、状況からの超出という文脈に収斂されるわけである。

著者に明らかにしてほしいのは、浮世草子↓「雨月物語」↓「春雨物語」と展開していくときの、秋成の内的必然性と読本というジャンルを選び取っていく必然性について、しっかりと述べてほしいということである。浮世草子で自覚された課題は「雨月物語」にどう持ち越されたのか、あるいは捨象されたのか。その後、なぜ『春雨物語』のような表現を選んだのか。状況からの超出だけでは、秋成の抱え込んだ課題の行方がどうも辿れないのである。このあたりを、もつと具体的に描写する必要があるのではないか。本書の場合、こうしたジャンルの以降については、社会状況の変化ということであつさりすませているように思える。浮世草子から読本のジャンルを選び取るありようが、表現史の角度からと内的必然性の角度からの両面から追究されなければならぬまい。

次に明確なテーマとなっているのは、『雨月物語』の「吉備津の釜」「蛇性の姪」にみられる封建社会における「家」共同体と個人の問題だろう。これまた、古くて新しい問題であり、著者があらためて示してくれたわけだが、鮮度はいささかも落ちていない。著者は、「吉備津の釜」の正太郎の行為を、磯良個人に対し

てというより「家」共同体への裏切り、神への「犯し」だと捉える。当然、磯良の崇りも、個人的な怒りとは違う、得体のしれない不可思議な次元からの発動となる。こうした捉え方によって、「吉備津の釜」を「家」共同体との関連において意味づける方向性は評価できる。「蛇性の姪」の主人公豊雄を形成する要因として、二つの母胎を挙げているのも効果的だ。すなわち「本来の母胎」＝豊雄の生まれ育った家と土地、「もう一つの母胎」＝真女子と過ごしている空間である。著者は、「裡なる（異国）に生きる豊雄」「裡に（異人）を抱える豊雄」を想定するが、この想定は「蛇性の姪」を理解する上での的確だと言える。

ただ、もう少し立ち止まって考えてもよい。豊雄は、封建社会の漁師を束ねる「家」の秩序から外れ、王朝的な歌物語の世界に関心をもつ男である。しかし、彼を取り巻く環境は、必ずしも彼に排他的ではない。父親は、「家」には役立たないかもしれないが将来博士か法師にする可能性もある、そのあたりの見通しが立つまで長男夫婦の「羈者」（厄介者）にしておこう、といった寛容な態度で臨んでいる。内なる（異人）（異国）からの出発が可能なのである。豊雄は、真女子の呪縛を苦勞しつつ脱する度に、「もう一つの母胎」を出て「本来の母胎」に帰るわけだが、このことの意味をどう考えるか。この現実界に「もう一つの母胎」を内包していること自体、『雨月物語』が幻想境＝異界の闇の装置を必要としない試みがなされはじめている証ではないのか。異界が内面化される条件が到来しているのである。これは、近世封建

社会における王朝的なる者の意味を問うことにもつながる。著者の視点に即しても、現実の観察者の手になる『春雨物語』の世界を呼び出す契機になっているのではないか。豊雄の成長は、内面化された異界が封建社会の中で活路を見出していく過程でもある。著者の言うように、豊雄は成長した結果、「本来の母胎」たる「家」の論理に絡め取られたかもしれない。しかし、見出された契機は、『春雨物語』に引き継がれていくものだと思う。著者の場合、このあたりの問題については、「蛇性の姪」の範囲内で収めようとするのが気になる。やはり、初期の頃に直面した問題は晩年ではどうなったのか、秋成は年とともにどのような問題を発見していったのかといった、背景の文学史も含めた史的な展開を内在的に追う視点が弱いからではないのか。

前後するが、第一部の「初期小説の水脈」で示される「和訳世界からの超脱」は、〈緬い交ぜ〉のあり方をどう考えるかという問題を考えさせられる。森山重雄氏の方法を踏襲しているのかわいのか、そのあたりをもっと明確にする必要がある。確かに、秋成の浮世草子と演劇との関係にもっと注目する必要があることを、『世間妾形氣』一之巻、同巻の三にまたがるお春を主人公とした物語（著者は「お春物語」前編・後編とする）の背景に「鳴神物」の流行をおいて証明しているところは説得力がある。殊に、従来浦島伝承を下敷きにして作られているとの指摘に留まっていたのに比し、秋成が女主人公に変えた点に着目しつつ、その背景として「女鳴神物」の趣向を指摘した点は興味深い。当世の狂言

の趣向を取り込み浦島伝承と交響させるわけだが、こうした（編い交ぜ）の効果については丁寧な説明がなされている。しかし、ここでもやはり、秋成の抱えたこの時点で、そして『雨月物語』や『春雨物語』へと展開していく内的な問題がみえてこない。どの時点をとっても、状況からの超出に回収されてしまうのだろうか。

第三部「素材と典拠を求めて」のあたりも、かなり大胆な試みがなされている。『雨月物語』の「青頭巾」と「武蔵坊絵縁起」の関係を詳細に論じている点には、感服させられた。挿絵と本文との関係については、著者は前著『雨月物語の探求』以来大きな関心を寄せていたようだが、江戸読本隆盛期の一般論で済ますのではなく、「上方の初期読本である『雨月物語』の個別事情」に即して明らかにしようというのは、新しい試みだろう。「青頭巾」と「武蔵坊絵縁起」とを対比しつつ、単に絵のレベルだけではなく内容面をも視野に収めて論じられるかという問題を立てているのを見ると、今後の著者に「挿絵と『雨月物語』」というテーマをたてて独自の見識を披露してもらいたくなる。評者などはこの点に関しては無知・無見識を暴露せざるを得ないので、著者に期待したい。

第四部『春雨物語』への視点』では、『春雨物語』の序文解釈を中心に苦闘を重ねながら自論を展開している。長年、著者がこだわってきた問題だと思われる。

高田氏の見解を下敷きにして言えば、秋成の異能は時代を取

り込みながらも、本格的創作の開始期から最晩年までの時間に、虚構としての趣向から、内向的な自己告白を吐露するための趣向へと次第に突き進んでいったのではないだろうか。この趣向は、時とともに私的観念を表出するための回路として醇化され、晩年に確立されていったという経緯をこの期間に見てとることができるように思う。

「虚構の趣向」から「内向的な自己告白を吐露するための趣向」へ。これを証明するための苦闘から逃げようとする著者の姿勢は、よくわかる。そして、確かに著者の言うとおりなのかもしれない。しかし、ここで取めると、同じバターンのくり返しになる恐れもある。要は、ここから表現史的にどこへ向かうかだ。もはや本書だけの問題ではないが、最近の『春雨物語』研究は、「命禄」で終る議論があまりにも多いように思う。だからどうなのだと、どうしても問いたくなる。

なお、各編での著者の見解には傾聴すべき点も多く、今後の秋成研究に生かすべきところも少なくないの言うまでもない。

（双文社出版、二〇〇三年二月一八日、三六四頁）

本体価格三四〇〇円

（やました・ひさお 金沢学院大学教授）